最優秀賞
文部科学大臣賞

つながりの中で生きる

秋田県横手市立平鹿中学校
三年　柿﨑正宗

平成最後の夏。甲子園をわかせた我が秋田県の金足農業。その熱闘に勝るとも劣らない熱い戦いが今年の夏も僕の中で行われた。それは、棚経である。

僕は中学校に入学してから親戚のお寺でお盆の墓行を手伝っている。それももう三年目、少し慣れっこになって油断している自分がいた。ところが、夏休み直前、父から突然「今年は棚経もやるからな。」と告げられたのだ。

部活動も、夏休みは剣道の昇段審査の練習だけ。受験生ではあるものの、そんな意識はまだ当然低く、去年の夏休みよりはゆっくりできそうだなと思っていた矢先である。仏様は新たな試練を僕に課してくださった。

そもそも棚経とは何なのか。それは、檀家さんのお宅を訪問し、御仏壇の前でお経を上げさせていただき、その家のご先祖様をお迎えするお勤めのことである。

棚経は二人ひと組で回るが、一軒の家に上がるのは一人ずつだ。助けてくれる先輩はいない。自分だけが頼りだ。

一軒目のマウンド。いや座布団に上がる。「人の家に上がるのだから、礼儀よく、失礼のないように！」そんな父からの余計な忠告もあって、緊張はMAX150㎞、すごい緊張だ。変な汗ばかり噴き出してくるのは、暑いさ中に黒い袈裟を着ているからだけではないだろう。

木魚や鐘を鳴らすタイミングを間違えたらどうする？　読経に詰まってしまって頭が真っ白になってしまったら？　考えたくもない想像ばかりが頭をよぎる。余計なことばかり考えるので、なんだかおなかも痛くなってきた。口がうまく回らない…。そんなこんなでほうほうの体で逃げるように一軒目を後にした。

これはまずいと思い直し、二軒目のマウンドに向かう。剣道で鍛えた精神力を生かすのはこの時だとばかり、ギアを一段あげて臨んだ。

やはり、人間ここ一番では気合いがものをいう。二軒目の読経は一軒目に比べてはるかにスムーズに行えたような気がした。しかし油断大敵。ほっと胸をなで下ろしてマウンドを降りようとする僕の目の前で、「ガツン」という音とともに突然火花が散った。なんと仏間の梁に額をしたたかぶつけてしまったのだ。

一瞬何が起きたか分からず、あたりを見回す。檀家さんは皆笑いをこらえるのに必死の様子。大エラーである。しかし檀家さんは僕に気を遣ったのか、「天井低いから気を付けて、と言っておけばよかったね。」とフォローしてくださった。非があるのは僕なのに、快く許してくれる様子で、まるでこちらが仏様に救われたような気になった。

「無難な立ち上がり」にはほど遠い状態で午前のお勤めを終え、いったん待機場所であるお寺に戻った。昼休憩を取り、そこでまた気を緩めてしまうのが僕の悪い癖だ。午後の失態につながることをしでかしてしまっていたが、その時の僕は、そのことに気が付いていなかった。

午後の棚経が始まる。僕は午前中のような失敗がないように、細心の注意を払って再びマウンドへ上がった。さて、お経を上げるために御仏壇のろうそくへ火を付けようとしたその時だ。袈裟の懐に入れておいたはずのライターが見当たらない。あれ？　あれ？　いくら探しても見当たらない。「そうだ、お昼休憩の時にテーブルの上に置いていたんだ。」そう気が付いた時にはもう後の祭りであった。

お昼にいったん引けていたはずのあの気持ち悪い汗が、また一気に噴き出してくる。おそるおそるマッチがないか尋ねてみた。すると「あ、気が付かないでごめんね。」とまたも檀家さんの方に気を遣わせてしまった。

そうして午後はマウンドに上がるたびにマッチやチャッカマンを求める始末…。夕方には汗を拭くためのタオルがびしょびしょになってしまい、そのタオルをそっと入れておく袈裟の袂もとても重くなり、その重さが余計に僕の気分を重くするのだった。

初めてだから…。そんないいわけさえ出てくる僕だったが、そんな僕を支えてくれたのはやはり、檀家さんたちだった。二日間で四十軒以上回ったのだが、どの檀家さんも優しく親切だった。これは親戚の家であったそのお寺が、地域にしっかりと根付いて、信頼関係のもと成り立っているからだと思う。

檀家さんにはお年寄りから若い方までさまざまな世代の人たちがいた。その人たちと亡くなった方とのつながりの中にお坊さんはいる。そのつながりこそ、僕という人間に意味を持たせ、力を与えてくれるのだ。

僕は、剣道を志すものとしても、人としても、お坊さんとしてもまだまだ半人前以下だ。しかし、地域の信頼に応えるためにも、これからも少しずつしっかりと成長していきたい。きっと大丈夫。家族、友達、先生、そして檀家さんがバックで支えてくれているのだから。